

かわさきしがいこくじんしみんだいひょうしやかいぎ
川崎市外国人市民代表者会議
(第7期 第1年 第4回 第1日)
ぎじろく
議事録

1 日時 2009 (平成21) 年1月25日 (日) 午後2時～5時

2 場所 川崎市国際交流センター

3 出席者

(1) 代表者 24名

金成美、金勇徳、高義甲、権純徳、趙龍濟、朴海淑、裴康徳、殷珊瑚、
姜弘、金蓓、張学峰、古谷史子、楊帆、高橋ロサ、パラードベルフェ、
中森ジュリアみどり、石川サイルン、タオワンキッティチャイ、エロック・ハリマー
モッハマドアスリ、ユナズイサヌルアフディ、アディカリスティブ、
千田マリアナオアナ、クシュタオレナ

(2) 事務局

小野寺室長、亀田主幹、石川主幹、清田主幹、
高村主幹、小川主査、渋谷専門調査員

4 傍聴者 8人

5 会議次第 (公開)

(1) 開会

(2) 事務局説明

(3) 議事

(4) 報告事項

(5) その他

(6) 事務連絡

(7) 閉会

6 議事等の経過

【全体会】

委員長 「初めに、まず、明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願ひします。

それでは、2008年度の第4回第1日目の会議を始める。まず事務局の説明からお願ひする。」

事務局 「本日は、教育委員会の総合教育センターの指導主事をお招きした。教育文化部会の審議に入っただく。今日の予定は、オープン会議の報告、2009年度の会議日程のお知らせ、2008年度報告書について、そしてこれまで提言の取り組み状況の報告を部会審議の前に行う。それから、事前に案内した『かながわ医療通訳セミナー』が昨日開かれ、フィードワークの扱いはなかったが、3人の代表が参加した。」

<<オープン会議の報告>>

委員長 「オープン会議に関しては、事前の広報などを含めて多くの協力、ありがとうございました。

当日は雨にもかかわらず120名の方にいらしていただき、成果があったと思う。部会ごとにまとめが資料になっているので、ぜひ部会での検討をよろしくお願ひする。

アンケートとは別に、オープン会議で何か気づいたことがあるか。オープン会議に参加された一般の方の中には資料の提出をもっと事前にしてほしかったなど、いろいろ指摘があった。今回は第7期の1回目のオープン会議であったので、議論のテーマを絞らない配慮と

して、そうした資料の提出を控えた。2009年度のオープン会議に関しては、提言に向けて的が絞られてくるで、そういう意味ではもう少し活発な意見が出るようなオープン会議ができるのではないかと思う。また、代表者会議も12年を迎えて、来年以降、第8期、第9期と続く中で同じ形ではなくて、もう少しいろいろなテーマを出したらどうかという案も実行委員会では出された。次回はそうしたことも踏まえて、提案していければいいと思う。それでは、事務局から2009年度の会議日程・報告書について報告をお願いします。」

事務局が会議日程・報告書について報告。

<<提言の取組状況>>

委員長 「続いて、市の提言の取組状況についての報告もお願いします」

事務局が、これまでの提言について、市の担当局からの取組状況の回答を報告。

委員長 「これについて何か不明な点、わからない事はないか。」

委員 「Bとなっているところは、継続的に検討中なのか、それとも出来ない理由、その回答はないのか。」

事務局 「例えば、国に要望を続けているが、国が改善されないときには要望を続けていかなければいけないということでBにしている。」

委員 「こういう理由でできないという回答はないのか。」

事務局 「例えば、教育では、14～15歳に日本に来た子どもが中学に編入した場合に、中学3年生に編入するところを中学2年生に下げて編入させ、日本での勉強に追いつくようにしているが、1～2年で高校受験ができるようになるのは難しいと回答している。」

委員 「年金について。帰国時の脱退一時金は、5年でも15年いても、もらえる金額は同じであるが、それは変わらないのか。」

事務局 「変化はない、年金については国を動かさなくてはならない。」

委員 「こちらから要望し続けて、回答を待つしかない。」

委員長 「ぜひ部会でも、また自宅でも再度読んでいただきたい。過去の提言と取組状況を踏まえて、再び提言可能かなど検討できる思う。ではこれから部会に移る。」

【教育文化部会】

部会長 「部会の審議に入りたい。本日は、川崎市総合教育センターで外国籍の子どもたちへの支援などを担当している指導主事をお招きした。」

教育 「子どもたちのためにいろいろなことを行っているが、悩んでいる部分がある。一緒に考えていきたい。答えられることは一生懸命答えていきたい、たくさん質問してほしい。」

部会長 「このチャンスを利用して、教育に関する質問をどんどん出してほしい。早速審議に入るが、まず事務局に前回の会議と、オープン会議の教育関係のまとめをお願いします。」

事務局が、前回会議のまとめと、オープン会議において出された意見をまとめたものを報告。

委員 「夜間中学校を卒業した外国人の子どもが、全日制公立高校を受験する時、夜間中学校を卒業した子どもには何か有利なところはあるのか。それとも、逆に特別な試験を受けなければならないことがあるのか。それとも、全く一緒か。」

教育 「全く一緒である。」

委員 「神奈川県内の在県外国人特別募集枠と受検者数および競争率に対しての、受検者数は国籍別に統計を出してもらうことは可能か。」

事務局 「公表されているデータでは国籍別のデータはなかった。県に問い合わせしてみる。」

委員 「教育委員会に教えていただきたい。前回出された意見に、小中学校への入学時に外国にルーツを持つ子どもと親を対象としたオリエンテーションを徹底できないかという意見があった。現在、川崎市内にあるすべての小中学校ではどういう状態か。」

教育 「小中学校入学の子どもたちに対して、就学案内を外国人登録した方全員に、教育委員会から多言語で案内を出し、10月の就学検査を行っている。そこで学校の説明をさせてもらっているが、その説明はあくまでも小学校の説明会で、外国につながるのがある保護者が日本の学校制度を十分に理解できるほど丁寧に伝えていない。それ以外に、幼児教育センターがある。外国につながる人たちも声をかけて、幼稚園にも行っていない子どもたちを集めて、4回から5回体験入学を実施しているが、なかなか情報がうまく伝わっていない。ほかには総合教育センターに面接に来たときに案内を少しずつやっている。」

委員 「編入する場合はどういった対応か。」

教育 「基本的には、総合教育センターで受験の説明や日本の学校の説明を、十分ではないが行っている。体操着だとか基本的な文化の違いも伝えている。しかし、いつ来られるかわからないこと、年齢も小学校1年生から学齢を越えている方など、ケースは様々である。現在はそうしたことを踏まえて、子どもを丁寧にみながら情報を提供している状況。また来年度から区で教育相談ができるようになる。」

委員 「国際化の中で、日本国籍を持っている外国人、両親の一人が外国人という子どもはとても多い。その子たちにはどんな対応しているのか。小学校に入るとき、母親が説明を聞くが、日本語が少ししかできない可能性は高い。また子どもの日本語能力に対して、親の日本語能力が低い場合、様々な影響が生じる。また母語によって、日本語の習得が困難であると、全教科に渡って影響が大きいと思う。」

教育 「とても難しい質問。日本語の指導に国籍は関係なくて、日本語が十分ではない子には支援している。」

委員 「確かであるかわからないが、親がとても簡単な日本語しか話せない場合、子どもは日常会話には問題はないが、とても簡単な言葉しか話せず、交流に問題が生じる。この場合、子どもに、もっと勉強させるとか、どんなチェックをしているか。」

教育 「そこまでの支援は十分にできていない。家では母語で過ごす場合でも、両親が少しでも日本語を勉強するような姿勢を見せて、家で一緒に勉強をしてくれる家庭と、そういうことのない家庭がある。仕事が忙しくて日本語を勉強する時間もないという。そうすると子どもも、日本語をどうやって勉強していったらいいのか、家庭ですごく悩んでいる。学校でも一生懸命いろいろな人が入って、サポートしているが、どういう支援をしているかは、やはり十分ではないという認識。大きな問題だと認識しているが、サポートをする人がなかなかいないという現状。」

委員 「日本は移民国ではないから、サポートはかなり少ない。カナダでは、勉強ができるレベルになっているかチェックして、できない子どもは特別な勉強をさせる制度がある。日本は、そのまま学校に入り結局、劣等感を持つ。子どもが大きくなった時に社会問題になる可能性がある。日本は制度から何か動きはあるか。」

教育 「そこに到達するまでに何をやっていくかが大切だと思う。川崎の場合、多言語の方が来ていて、色々なところに住み、川崎で活躍しているので、つなぐことが大切。日本語指導を

できるだけ予算をつけて万能なシステムにしようという発想も大切だが、それだけではなくて、例えば地域にそういう家庭を気をつけてくれる人がいるだとか、学校が声をかけて地域のボランティアを集めて家庭をサポートするようなどが、小さい動きではあるが、川崎の中にある。そうした動きをつないでいく姿勢が大切で、その中で行政がどんどん動いていくことが川崎らしさではないかと思う。ふれあい館や、麻生パートナーシップ、それから外語大の学生が、子どもたちを一生懸命サポートしている。皆で声を出し合いながら働きかけていくことが、子どもたちを支えることになるのではないかと思う。そういう発想が必要だと感じ、つなげることをすごく意識して活動している。」

いいん
きょういく
委員
教育

「小規模な活動や組織など、どのように伝えているのか。」

「オープン会議の時など様々な場面で紹介されおり、リーフレットを配布も行っている。しかしながら活動には限界はある。例えば 100人の子どもたちに対応できるような活動にはなっていない。教育委員会の日本語指導も 200人の子どもたちを年間でサポートしているが、やはり限界はある。そうした中で、みなさんの力をつないでいく発想は大切である。一生懸命発信しているが、届かないことは言ってもらいたい。」

ぶかいちやう
部会長

「この質問はとても現実的なもの。これを事務局に資料にしてもらいたい。例えば情報ふれあい館、先程の例、あと麻生区、学校で支援をやっている、国籍によらず勉強できない子は放課後、川崎小で1カ所やっている。宮前小の日本語教師も少し対応している。現在の情報を集めて、その情報を考えてみたい。情報をどうやって皆さんに知らせるか。例えば窓口置くかとか。」

じむきよく
事務局

「話があった地域や、いわゆる区より小さな単位、例えば小学校の単位で行われている活動をまとめたものを資料として次回報告する。しかし、地域のことなのでこぼれおちてしまうケースも考えられる、知っている情報があったら、教えていただきたい。」

いいん
なんてん
にほんご
しどうとうきょうりよくしや
はけんじぎやう
委員より、何点か日本語指導等協力者派遣事業について質問。

きょういく
委員
教育

「日本語指導等協力者派遣事業は今年度3,520万円の予算で、子どもたちを支援している。今年度は、去年と比べると、子どもたちが55人多く入ってきた。多く予算をとって、子どもたちを長く支援したいと考えている。他の事業と異なり、日本語指導が必要な子どもたちの数が予測できないので、子どもたちの数が多い年度は迷惑をかけている。協力者は基本的には同じ方だが途中で変わることもある。規模が大きいので、協力者の家庭事情など、いろいろなケースがあるのでご理解いただきたい。それから子どもと協力者の相性も配慮しているが、十分ではないこともあると思う。」

川崎のよさでもあるが、ほかの市町村だと同様の協力者になるには資格がいるが、川崎の場合はない。協力者自身が国の事業に応募し研修を開いている。このように行政主導ではない動きもみられる。

基本的には、1対1で週2回・1回2時間ということで、本当に限られた時間ではある。初めの1か月に集中して派遣したい思いはあるが、どのぐらいの子どもたちが、いつ来るかと本当にわからない状況であるので、柔軟な対応は難しい。日本語の指導に関しては、日本語のマニュアルというのがある。しかしながら、単純に日本語を教えるということではなくて、子どもたちを温かく受け入れて、学校を楽しんでもらうとところからスタートしている。日本語指導等協力者派遣事業の「等」は、心といったものを大切にしているということである。」

いいん
委員

「学習の支援ではなくて、あくまでも言葉の指導であるのか。」

教育 「基本的には言葉の指導である。初期の日本語指導でやっているが、中学になるとそれだけでは足りない。学習支援も2年やっている子どももいる。そのような状況。」

委員 「例えば協力者が、子どもの親に運動会や進学などの説明などはできないのか。」

部会長 「協力者の日本語指導等の「等」の中には、翻訳、通訳も入っている。学校の卒業式、進路の説明会、運動会など、いろいろなサポートをやっている。」

教育 「協力者には、小学生と中学生のどちらも担当してもらっている方もいれば、小学生だけ担当している方もいる。いろいろなバリエーションの中で運営している。母語を話せることと、その国の制度を知っていることは大きいこと、逆に日本の先生にも協力者を通じて、学んでほしいところは多くある。」

委員 「結局、教育は行政と学校だけではなくて、親の責任もある。私は、他の都市で3年間ボランティアをやっていたが、外国人の親はボランティア任せになりがちである。連絡なしで、ボランティアならやってくれるだろうと勝手に思う親が多かった。こちらから連絡すると、必ず仕事を理由にする。外国なので、子どもだって大変。そういうことも含めて、オリエンテーションの重要さをもう一度わかっただきたい。行政から強く親に伝えてほしい。学校やオリエンテーションに興味がなく仕事、仕事と言って、子どもに問題が起こったら、いきなり学校がやってくれないのかと言われても学校は困ると思う。一度も学校に来たことのない親や、ボランティアのことをわかっていない親は多い。この部会の1つの提言として、小学校、中学校、高校、すべてのレベルでオリエンテーションの重要性を行政に訴えたい。それと同時に、外国人の親たちにも、もう一度徹底的にオリエンテーションすることを提言に持っていくのがいいのではないと思う。」

部会長 「今までとは違う意見だが、とても良い意見。親も学校、社会、家族が、教育に関わるべき。われわれ外国人の親たちも、教育に責任を持ってほしい。そのためには日本の学校のシステムを理解するのにオリエンテーションは必要。」

委員 「私もこの意見に同感。日本人のお母さんたちは、自分の子どもの教育に、責任を持っている。こういう親たちの自分の責任感を、私たちが勉強しなければならない。」

【社会生活部会】

部会長 「オープン会議のまとめと多言語社会リソースかながわ(MIC)のセミナーの情報も踏まえて、議論していきたい。」

事務局よりオープン会議のまとめを報告。

委員 「横浜のコールセンターは、どういったシステムなのか。」

事務局 「3カ国語の対応で、電話相談を行っている。」

部会長 「川崎市も、日本語と英語だけだが『3939・サンキューコール』というのがある。」

事務局 「サンキューコールの場合は、担当を紹介する形で相談という形ではない。よくある質問に対してはFAQも用意されていて、簡単なものはコールセンターで回答している。」

委員 「横浜市のコールセンターは、医療関係とは全く関係ないのか。」

部会長 「外国人にとって、電話1本で何でも教えてくれる窓口があるのは非常に助かる。川崎市のものは、市政に関しては一般的に教えてくれるが、生活とか悩みとか市政を離れた部分では弱い。外国人はいろいろなところにアクセスするのが難しいので、『ここに電話1本すればいいよ』とか、『この場所に行けばいいよ』というように1つにまとめた窓口が望ましい。オープン会議で出た意見の、代表者会議の議事録のウェブサイトの更新が遅いという

件について何か答えがあるのか。」

事務局

「業者が全発言を文章におこし、事務局で議事録を作成し、さらに代表者に最終確認していただき、インターネットに掲載している。1～2ヶ月かかってしまう。」

部会長

「もう少し早くする工夫が必要だと思う。」

委員

「タガログ語での臨床翻訳の本がある。フィリピン人の大学教授と、日本人の医師が共同で作成したもの。他にも何ヶ国語かで臨床の翻訳集がある。見た限りではわかりやすい。組織ができれば、これは使えるかもしれない。」

委員

「これから考えていかなければいけないのが、大学などとの協力。MICかながわのセミナーで、タイ人ボランティアはタイ大使館とネットワークを持っていて、医療情報を在日のタイ人に伝えると言っていた。この代表者会議もいろいろ国の人が参加している。各国のネットワークを作り、活用していかなければならない。そしてそうしたネットワークを他へと繋げていければと思う。そうすれば1つ1つの言語に対して、これは話せる人がいないからと捨てていくのではなくて、すくい上げられるのではないか。そのためには縦に流れている情報を横の形で交流する仕組みが必要である。『ずきずき痛い』とか、『しくしく痛い』とか、やはり国によって異なる。医療に関しては、難しい言葉を患者さんに伝えるのに、どこまでかみ砕けばいいのだろうか。やさしい言葉で言えばいいといっても、やさしい言葉では色々な意味で解釈ができてしまうかもしれない。

またMICかながわのセミナーでも指摘されていたが、『医療しか受け付けられない』としながらも、やはり生活の問題などで伝えられない部分を代弁してほしいという思いがある。そうすると医療にリンクした社会生活全般を扱う形になってくる。1つに絞っていくと、余り活用性がないものにもなりかねない。その意味では、いろいろな国の人から、私の国のコミュニティは、このようにして助け合っているというケースをどんどん出して、共有していけないと意味がない。我々自体が動かないことには、ここでずっと話しても実体験を伴わないことにはどうにもならないと思う。」

部会長

「その意味では、今議論している内容の外国人医療新システムみたいなものができれば、その各分野の人たちが集まって言語ごとに、もっと掘り下げていけるのだと思う。将来的には通訳の医療専門システムみたいなものができたり、もっと特化していくのではないかとと思う。特に医療というのは非常に大事なことで、調べてないと何とは言えないが、国によっては、その専門科目、専門ソフトウェアがあると思う。そういう各国ごとの、そのシステムを用いられれば、日本語とタガログ語、韓国・朝鮮語と日本語のような専門医療通訳の、そういう翻訳システムをネット上で用いられることで、かなり医療通訳システムには活用できるのではないか。その医療の翻訳システムも、どんどん人が使うことによって、どんどんよい方向に変わっていく。」

委員

「自国民を助けるという大前提ができれば、各国の大使館とも協力体制が持てると思う。例えば支援金を出すとか、この翻訳ソフトをこちらで自由に使って良いとか。」

部会長

「実際物がないのではなく、あちらこちらに散らばっている。それを統括して、まとめる中心的な核になる人がいないだけ。まとめられるシステムがあればよい。特にオープン会議は外国人の発言が非常に多かったが、私たちの思いとほぼ同じような内容が出ていた。高価なサービスは使えない、緊急時などいつでも使えること、手に届きやすいこととか、私たちの議論とかみ合うところが多い。次に、事務局に前回の議論のまとめをお願いしたい。」

事務局より前回の社会生活分科会のまとめを報告。

ぶ かいちよう
部会長

「全体会議でもあったように、MIC医療通訳セミナーの参加者の話を聞いてもらいたい。それぞれの意見、内容、感じ、この会議で照らしてどうかを話してほしい。」

い いん
委員

「感想としては、MICもボランティアをベースに運営しているにもかかわらず、医療通訳の専門性も高く求められていた。そうすると、医療通訳者に大変な負担がかかる。この問題を考えていかなければならないと思った。それと、現在医療に関わっている人たちに、医療通訳の必要性や有効性があるかに対するアプローチを、これからどうやっていくかが大事な問題であり、1つの課題になっているのではないかと考えた。最近、国際交流協会などの相談所にも医療通訳についてニーズが高く、研修は行っているそうだが、それに対する派遣は伸びてない、コーディネーターの役割を持っている方がいないからではないかという話があった。私も同感で、医療通訳の派遣も大事だが、それをつなぐ役割のコーディネーターの育成しなければうまくできないと思った。」

い いん
委員

「MICに登録している方は、ボランティアなのかプロなのか、線引きがされていないのが、すごく不安だと言っていた。そこでアメリカの例などいくつか紹介された。アメリカでは『いかなる米国民も人種、皮膚の色、出身地を理由として・・・』という前提があるが、『言葉が不自由であることを理由に医療サービスの利用において差別が生じてはならない』とうたわれている。しかしながら実際にしてみると、十分に対応できている州はあまり多くない状況にあるようだ。ただ、アメリカでは医療通訳者がプロとして生計を立てられる環境が整備されている。例えば、家族は自分の身内に関して翻訳通訳はできないと法律で決められている。日本では、コーディネーターやコミュニケーターと呼ばれたり、都合のいい言葉に解釈されているので、そのスタンスがあいまい。あいまいなままであると、お互いにとってリスクを伴っていくのではないかと。あと1点、この部会ではインターネットを使った方がいいとは言っているが、テレビ画面で、『あなたガンです』と通訳する場合などの、患者の心のケアなどが指摘された。」

じむきよく
事務局

「最初に、医療通訳スタッフ、医療通訳をしている人たちからの聞き取り調査の結果報告があり、それについて、ボランティア、アマチュア、プロなど様々な通訳者が、意識の中で迷いが生じているという話だった。それから、あと2つ報告があり、例えばスイスなど、それぞれの国の医療通訳制度がどういった扱いになっているか説明が一部入った。最後に、日本の医療通訳最新事情という話が出て、行政側からすると公立病院では、私立病院が採算性がとれず返上する部分でもやらなければいけない。一方では市民全体から集めた税金を赤字を抱える病院に投入することに対して国も締めつけを行っている。採算がとれない病院というのは、即刻切り離すような厳しい中で、公立病院がやはり収益を考えて動かざるを得ない状況を聞いている。医療通訳のMIC側からも、そのようなことを考えるようになって、医療通訳もなかなか受け入れてもらえなくなってきたという話があった。」

い いん
委員

「今後、MICはどのように変化していくのか、現場の人たちがどのように改善していこうと思っているのか。その方向性についての話があれば、われわれの提言の参考にしたい。」

い いん
委員

「個人的なことだが、委員の方に先ほどお子さん生まれたと聞いた。」

い いん
委員

「川崎ではないが、子どもが生まれた。」

い いん
委員

「あちらに奥さん連れて行き来して、経験した事で、病院がこうだったら良かった事などがあれば、聞きたい。奥さんは日本語を話せるのか。」

い いん
委員

「話せない。私がいけないと健診もできない。研修の仕事で、私は平日、病院には行けなかった。土曜日か日曜日に受け入れてくれる病院を探すのが結構大変だった。ご存じだと思います。」

うが、日本の産婦人科はとても不足している、健診のみの病院を探すのも、英語ができる医師を探すのも難しかった。結局、運が良かったのか、土曜日やっている病院が見つかり、連れて行った。実際の出産のときも結構問題があった。妻は、日本語はできないが、医師なので、向こうも安心して、片言の英語で説明して、安心して出産できた。あと、母国では入院すると家族はいつでも病院に行ってもいいのだが、見舞いの時間、面会の時間しか会えない。妻にとっては不安であったと思う。毎日いろいろ健診などがあるが、そのときも『日本語ができないから英語で』と彼女が言っていて、英語でやりとりできたが、それは、彼女が医者だからで、普通の人だとどうだろうかと考えてしまう。」

いいん
委員
いいん
委員

「土曜日に診察可能で、英語を話す先生をどうやって探したのか。」

「私は日本語が出来るのでネットで探した。あと向こうの区役所にも行って、土曜日やってくれる産婦人科はどういうところか説明を受けたが、日本語できない人には難しく、探せないかもしれない。」

ぶかいちょう
部長

「1つの問題点が出た。日本語がわからない患者の場合、治療や、健診だけではなく、入院したときも通訳はいる。一般の人は、家族でも誰でも面会できない時間があるとしても、家族であり通訳の立場。家族以前に通訳として入れてもらえる柔軟性をとればいいことだと思う。」

いいん
委員

「身内が川崎でも膜下出血になったが、なかなか受け入れ先がなくて、結局、横浜の病院に入った。そして、緊急に手術となり、担当医師が2つの方法について、詳しく説明する必要が生じた。最初に『日本語は十分に理解できるか』と質問されたが、なかなか答えられない。専門的な日本語が理解できるかわからない。逆に『この病院に、英語ができる通訳者か、先生がいるか』と質問したが、答えはあいまいだった。でも判断する必要があったので、自分ができる範囲の日本語で説明を受けて、それをみんなに通訳することにした。医師が本当に優しかったので、英語まじりの日本語で説明してくれてなんとかあった。医療の場では不安な時がかなりある。日本語が理解できても、何となく不安。」

いいん
委員

「医療と別の話題をしたい。ご存知のように世界経済が不景気でリストラが行われている。私の会社は派遣会社で、社員は50%がリストラされた。ハローワークへ行くと、日本語の通訳問題も生じる。だから、医療、病院だけではなくて、市役所、ハローワークも通訳がととても必要だと思っている。困る人はたくさんいる。やはり医療問題は話をしたいが、もし時間があればその事も話したい。だから、市役所の看板の下に英語を書いてある文字を大きくしてほしいのと、英語のできるハローワークの職員も必要。」

いいん
委員

「ハローワークに日本語ができない友達を、何度か連れて行った。大きなハローワークでは、いろいろな言語で対応できる職員がいる。」

いいん
委員

「ハローワークはパソコンがたくさん置いてある。使い方さえもわからないから、外国人は、ととても不安。」

いいん
委員

「以前、区役所の件でも話したが、外国人が用のあるは外国人登録の窓口だけでいいという発想が役所側にあった。子どもを育てている人にとっては児童手当をもらわなければいけない。車を持っていれば車検を取る必要があり、ナンバープレートも必要である。他にもいろいろある。」

ぶかいちょう
部長

「指摘されたように、すべての問題は、日本では日本語が話せる日本人しかいないという発想から始まる。日本にいても日本語を話せない、日本国籍でも日本語を話せない人がいる。日本・日本人・日本語、3つを全部満たせない人もたくさんいる。その発想が全くないから問題が生じる。特にハローワークは、日本語が話せないと仕事がないという前提。実際は現場のきつい仕事は、言葉の通じない外国人が担っている。もう少し優しく、広く

視野に入れた方がいいのではないか。」

事務局

「代表者会議サイトを開けると、派遣切りされた外国人の方に対して相談窓口を紹介している多言語資料を掲載している。ルビ付きの日本語と、ポルトガル語とスペイン語である。自動車業界からの大量の解雇に対して、その地域都市の市長らが急に申し立てを行った。それに対する厚生労働省の動きで、そうした多言語資料が作られた。」

部会長

「先ほどの述べたが外国人がいるという想定がないことから問題が発生することが非常に多い。医療通訳のことをもう少し詰めたい。MICの方向性について、資料を見てそれぞれ考えていただきたい。MICは、われわれにとって羅針盤でありモデルであることは事実。これからMICがどうなっていくか注目し、検討していきたい。いくつか問題や課題が投げられたままであるので、医療通訳のこと、オープン会議と前回のことをプラスして進めたい。」

委員

「医療の通訳の関係で、思いついたが、多言語のATMのような多言語対応の診察予約の機械を各病院に設置をしたらどうか。緊急の場合はどうしたらいいかは、想像がつかないが。」

委員

「難しいかもしれないが、受付だけでなく検診の予約など、それだけでもいろいろなことが兼務できれば、いいなと思う。」

委員

「初めての歯科医院へ行ったが、書かなければならない書類が多い。『妊娠しているか』『アレルギーがあるか』全部日本語で、英語も書いていなかった。」

委員

「歯科診療について、元代表者と話したことなのだが、川崎に限っては、通訳の要望などはないようだ。ニーズがないところに、通訳のスタンバイはできないということ。外国人が来ても、口を開けてレントゲンを撮るなりするだけだから、英語が多少わかればそれで十分。わざわざ通訳を入れてという作業はないという話。」

部会長

「救急車の件もそうだったが、患者の精神的な問題を抜きにして考えると、医師は診察すればわかる、言葉の問題はないと、はっきり言っている。ただし、それは医師の立場の問題であって、受ける側の立場は反映されてない。受ける側は精神的、身体的、両方をクリアしたいと思う。医療通訳も、実務的な問題と精神的な問題、そのバランスを取りながら、できるようなシステムをつくっていったら理想的かと思う。次回にもう少しこれを掘り下げた内容でまとめて、次のテーマを考えていきたい。MICとかわさきくコミュニケーションボランティア（CVK）の予定は決まったのか。」

事務局

「次回、CVKの方に来てもらい、直接話しを伺えるように用意した。」

部会長

「時間は後日、郵送か何かの形で知らせてもらう。では、CVKとMICの話から、具体的な思いを語る時間が実際に来ると思うので、次回にまた続けて議論したいと思う。今日はここまでにする。」

【全体会】

<< 教育文化部会より報告 >>

委員

「教育文化部会はレジュメに沿って、11月16日部会の内容確認とオープン会議で出された意見の確認を行った。その上で、11月16日会議で出された意見の中で、高校の問題と小中学校の日本語指導について討議を行った。主に日本語指導についての討議がなされて、日本語指導における小中学校のサポート状況・情報をもっと充実して、提供してほしいという意見がだされた。また、入学時などにオリエンテーションを徹底していくことを提言として入れたいという意見がだされた。外国人の親の場合、学校の上履きや体操着など日常の習慣のことから、進学を踏まえた子どもの子育てなど、わからないことが多い、先生や教育委員会だけではなく、行政にも理解していただき、オリエンテーションを

重視していただきたい。」

<< 社会生活部会より報告 >>

委員 「オープン会議で出された意見を検討と前回の議論を振り返った上で、MICかながわのセミナーに参加した委員の感想を聞いた。ボランティアの責任の問題、他国のケースなど貴重な情報があった。審議では、日本語ができない入院患者のために面会時間外でも医療現場への通訳者が派遣できればよいという意見があった。そして派遣切りが問題になっているが、ハローワークで英語など外国語に対応出来る職員を置いてほしいという意見があった。次回の進め方としては、かわさきコミュニケーションボランティア（CVK）を招いて、さまざまな意見や質問をして検討していく方針。」

委員長 「何かあるか。ないようなので、部会の報告は以上で終わりたい。」

事務局 「社会生活部会で医療通訳や医療支援をしている団体CVKに来てもらって話を聞きたいと前々から出ていた。それをフィールドワークの一環として行えたらということで、次回2月の会議にCVKを招いて話を伺う。時間などについては後日連絡する。」

<< 各実行委員会の報告 >>

多文化フェスタ実行委員会、市民祭り実行委員会、ニューズレター実行委員会から報告。

<< 各審議員からの報告 >>

川崎市青少年問題協議会、かわさき市民活動センター評議会、
2009年川崎市成人式の企画実施委員会の報告。

委員長 「各実行委員会および、各審議員の報告ありがとうございました。次回の代表者会議は2月22日。それでは閉会する。」